

吉田琢磨氏 ミナトタオル代表

革新織機でタオルを織るのが当たり前の時代に、シャトル織機のみを工場に置いて、丁寧にゆっくりタオルをつくる「タオルびと」がいる。それが、今回登場する吉田琢磨氏である。吉田氏が中堅のタオルメーカーから独立し、ミナトタオルを創業したのは1983年である。1980年代後半のバブル経済のときは順調に受注生産をつづけ、事業は軌道に乗った。しかし、バブル経済崩壊後の1990年代以降、タオル不況や革新織機時代の到来によって状況は一変し、長く苦しい時代に突入した。何度も事業の撤退を考えながら、それでも好きなタオルづくりを止めなかった。そして現在、シャトル織機の良さが見直されるなか、今治で唯一シャトル織機だけでタオルをつくる吉田氏は「時のひと」である。



吉田琢磨氏



よしだ・たくま ☆ 1943年10月、北海道空知郡滝川町（現・滝川市）生まれ。5歳のときに家族と今治に移住。今治市立近見小学校、今治市立近見中学校を卒業し、1959年に矢野亀タオルに入社。「油差し」からキャリアをスタートさせ、持ち前の好奇心とセンスによって屈指の技術者に成長。その後、渚タオル、新美タオルをへて1983年にミナトタオルを創業。現在も(有)村秀鉄工所製のシャトル織機12台でタオルを製造しつづけている。

1. 幼少期

とにかく食べていくのに必死だった

吉田琢磨氏は、1943年10月7日、北海道の中部に位置する空知郡滝川町（現・滝川市）において2人兄弟の末っ子として誕生した。秋田県出身の父親は、北海道で母親と出会い結婚し、二人の子どもを授かったが、戦争が終わって帰還直後に肺炎にかかり戦病死した。そのため、当時2歳だった吉田氏は父親のことをまったく覚えていない。母親は、幼い子どもたちを養うため、北海道で出会った今治市湊町出身の義父と再婚し、家族で今治に移住した。吉田氏が5歳のときである。

吉田氏は、実父の顔を知らず思い出もなかった。そのため、中学を卒業するまで義父を本当の父親だと思って育った。吉田氏は、「北海道のことをひとつも覚えてないんね。雪が降って真っ白になると、川が凍ってそのうえを人が滑りよる、くらいしか覚えてないんよ。本当にアホじゃとおもう。ひとつも覚えてないんよ」と茶目っ気たっぷり笑う。

寒い北の大地から温暖な今治に移住後、穏やかな生活が吉田氏を待っていたわけではない。義父は、家族を養うどころか、働くことすら無頓着な人だった。漁師町の湊町では、漁業の知識も船もない義父は容易に職を得ることができず、風来坊のような生活を送った。その分たいへんだったのは母親である。母親は、子供たちを養うためにタオルのヘム縫いで手内職したり、時には家財や着物を売って生活費に充てたり、母親と子供たちは糊口を凌ぐ暮らしを余儀なくされた。とにかく食べていくのに必死だった。

吉田氏は、今治市立近見小学校、今治市立近見中学校で学びながら、母親の手伝いをするのが日課だった。片道30分の道のりをぼつぼつ歩いて石井町にあった森金タオル（現在は廃業）まで、ヘム縫いを終えたタオルを乳母車のような入れ物に入れて運んだ。いま

振り返れば、吉田氏とタオルとの出会いはこのときである。

幼少の頃の楽しい思い出は、たとえば自転車など身近にあるモノを解体しては組立てるといふ遊びをよくしていたことである。「自転車はなんでこんな形になっているんやろ？どんな構造をしてるんやろ？どういう仕組みで動くんやろ？」と、自転車を見るたびに好奇心が湧いてくる。我慢できずに解体したはいいが、元に戻せなくなってしまい、怒られたこともある。しかし、この「想像-解体-再構築-満悦」という一連の行為がなんとも愉快だった。モノづくりの楽しさや興味は、こうして幼少の頃からあった。

2. 「油差し」として矢野亀タオルへ入社

1959年、近見中学校を卒業後、吉田氏は森金タオルと同じ石井町にあった矢野亀タオル(株)（現在は廃業）に「油差し」として入社した。矢野亀タオルは、30台の織機を所有する地元では中堅のタオルメーカーだった。吉田氏の仕事である油差しとは、織機に油を差して機械の調子を整える仕事である。矢野亀タオルでは、ちょうど油差しを担う男工（織機の世話をする男性従業員のことを男工と呼んだ）がいなかったため、吉田氏は即戦力としてタオル工場に入った。即戦力といっても油差しは初歩的な技術の部類に入り、タオル製織の技術者としての本格的な修行はこれからであった。

タオル工場への就職は、「成り行き」だったと言う。吉田氏が中学を卒業した頃、すでに今治ではタオルが盛んにつくられており、また母親が手内職でヘム縫いに従事し、自らもタオルの運搬の手伝いをしてタオルが日常生活の一部になっていたため、「今治におるんやったら、タオルやろ。それに一生できる仕事やな」とおもったからである。加えて、「昔はタオル工場の戸や窓が全部開いとったんよね。空調がなかったから、冬やったら閉めとるけど、春や夏やったら開けっ放しよね。戸や窓から覗いてみたら、カッチャンカッチャンし

よるのが見えよったんよ。いろいろな色があって、きれいだなと思ひよったんよね」と、タオルへの憧れもあった。

矢野亀タオルは、(有)村秀鉄工所製のシャトル織機が30台ほど設置してあった中堅のタオルメーカーであり、吉田氏が入社した1960年代前半は半木機^{はんもくき}の織機も置いてあった。村秀鉄工所はタオル織機を供給する地元の織機メーカーであり、村秀鉄工所のあとに(株)矢原鉄工や今治織機製作所などが台頭したことから、村秀鉄工所は今治のタオル織機の草分け的存在であった。矢野亀タオルでは、時代が進むにつれ村秀鉄工所以外の他のメーカーの織機、たとえば豊田織機も入れるようになったが、吉田氏が矢野亀タオルにいた期間に革新織機の導入はなかった。

「なぜ？」の繰り返しで技術を学んだ

吉田氏は、油差しからスタートし、糸結び、^{かせ}総掛け、織機の始動・停止に関する技術の習得に約5年を費やした。「まずは糸の結び方から覚えるんよね。そのつぎに織機を止めたり動かしたりすることを覚えなにかんのよね。昔は全部総糸で、総糸の場合一本の糸に巻いていかんとダメでしょ。そのとき糸を結ばないといかんのよ。それができんかったら用事ないんよ。どんな織機でも糸を繋がないと仕事にならんよ」という具合に、シャトル織機によるタオル製織は職人の細かな作業の積み重ねで成り立っていた。

吉田氏が入社した当時、矢野亀タオルでは10人ほどの男工がおり、技術の修得度合いによってランクがあった。一番上に工場長がいて、一番下に油差しがいた。吉田氏は油差しから入り、最後は工場長まで昇格したが、工場長になるには技術者としての確かな腕が必要だった。事実、昇格できず、途中で辞めていく男工もたくさんいた。


吉田氏が腕のいい技術者になれた理由のひとつは、油差しから織機の改造に至るまで、どんな作業においても理屈で理解しないと気

がすまない性格で、勤ではなくつねに理論でモノづくりを理解していたからだ。「なぜ？」を繰り返し、いつも考えながら仕事をした。さらに、吉田氏が幸運だったのは、矢野亀タオルには吉田氏の「なぜ？」に対して的確な答えを示してくれる頼もしい指導者がいた。昭和元年生まれの壺内伸雄氏である。

壺内氏は愛媛県染織試験場（現・愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）で研鑽を積み、矢野亀タオルに工場長として働いていた。「技術は目で盗め」という言葉があるが、壺内氏は違った。他の男工に比べてよく質問し食らい付いてくる吉田氏には、一から十までわかりやすく理論的に説明をした。当時の様子を吉田氏の回想から再現すると、つぎのようになる。

壺内氏 「シャトルは真っすぐ走るんじゃないぞ。真っすぐ走ったらおかしくなるんよ。」

吉田氏 「何で？」

壺内氏 「シャトルはスウィープって言うて、こうった具合に回っていないと向こうに辿り着かんのぞ。上から見たら遠心力で半円描いて、こっちから向こう向いて飛んで再びこっちに収まるような動き方するんね。シャトルは角度付けとるし、^{おさ}箆のレースも全部角度付けとんじゃ。なんでも理屈があるんやから、それを覚えて作業せいよ。」

壺内氏は、吉田氏が質問にいくと、仕事中でもわざわざ手を止めて手本を示してくれた。何度も繰り返し言われたのは、「科学的にせい、科学的にせい」だった。

こうした壺内氏の指導の甲斐もあって、吉田氏はモノづくりを目で盗むだけでなく理論で理解できた。だからこそ、技術者として頭角を現したのである。そして、織機の設置・修理・改造などを任される一人前の技術者に成長し、矢野亀タオルでのキャリアは15年

間つづいた。

この間に、生涯の伴侶となる女性との出会いもあった。愛媛県のほぼ中央に位置する上浮穴郡柳谷村（現・久万高原町）出身の登美江氏である。登美江氏は、中学校を卒業後、今治市内の縫製工場に集団就職し、その後矢野亀タオルに入社してヘム縫いなどの仕事に就いた。そして1965年、吉田氏は登美江氏と結婚し、長女、次女、長男の3人の子どもを授かった。

吉田氏は、矢野亀タオル時代において仕事とプライベートと充実した生活を送り、矢野亀タオルにとって手放せない戦力となっていたが、矢野亀タオルの社長の実弟が独立して新たにタオル工場を創業することになり、熟練の吉田氏が抜擢されて1974年に渚タオルに技術者として入社した。当時、渚タオルでは豊田織機が12台設置してあり、矢野亀タオルよりは小規模のタオル工場であったが、技術者として、また技術指導者として約10年間勤めた。

その後、矢野亀タオルからまたもやスピンアウトして創設された新美タオルに指名されて移動し、技術者兼営業として入社した。営業といっても、タオルを売り込むのではなく、問屋から「こんなもんつくって欲しい」と漠然としたイメージを持ち込まれたり、あるいは「このデザインのように変わったものをこしらえてくれ」と写真や絵、ときには見本などを持ち込まれたりすると、それを企画し製図に落としてさまざまなサイズのタオルを製織するのがおもな任務だった。新美タオルでは約5年にわたりタオルの企画・製織に携わり、その後、独立する運びとなる。

（次号につづく）

